

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 1 日現在

機関番号：32618

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010年4月1日～2013年3月31日

課題番号：22520105

研究課題名（和文）野口小蘋研究——作品・関連資料のデータベース化と社会的受容の考察

研究課題名（英文）Research on Noguchi Shohin: Compiling a database of her works and background, and a study of social influence of her works.

研究代表者

山盛 弥生 (YAMAMORI YAYOI)

実践女子大学・研究員

研究者番号：90433763

研究成果の概要（和文）：本研究は、明治から大正期にかけて活躍した女性画家・野口小蘋（1847～1917）の作品と伝記に関する網羅的な研究を行うと共に、当時の画壇における史的 position の考察を目的とする。目的達成のため次の調査を実施した。(1)小蘋作品と伝記の網羅的データベース作成、(2)年表作成、(3)作品成立の編年、(4)交流人物、活動地域の情報を収集し、小蘋の絵画制作や画風展開との影響関係を考察。調査の中で、これまで未紹介の最初期作品の発見があり、論文において小蘋の初期の画業の様相を具体的に提示することができた。

研究成果の概要（英文）：In this research, I looked exhaustively into the works and background of the female painter, Shohin Noguchi (1847～1917), and examined her historical position in painter's circles from the Meiji era to the Taisho Era. The following investigation was performed for the purpose:

- (1) Compiling an exhaustive database of Shohin's works and her background.
- (2) Creating her chronological table.
- (3) Creating a record of her artistic progress.
- (4) Collecting information about her personal relationship and her areas of activity, and considering how they influenced her works, and how her style of painting progressed. In the process of this investigation, three initially works were discovered. These reports focus specifically on drawing in the early stages of Shohin's carrier.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,700,000	510,000	2,210,000
2011年度	600,000	180,000	780,000
2012年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	2,900,000	870,000	3,770,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学 美学・美術史 2806

キーワード：野口小蘋、女性画家、帝室技芸員、玉山、日根対山、南画、文人画、煎茶

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

### 1. 研究開始当初の背景

本研究代表者は、実践女子学園香雪記念資料館に 2010 年度まで学芸員として勤務し、現在も研究員として所属する。同館所蔵の野口小蘋（1847-1917）作品について調査研究する過程で、小蘋研究における次のような問題点を実感した。

- (1) 小蘋作品の悉皆調査が必要なこと。
- (2) 印章や落款などの調査が不十分なこと。
- (3) 画風展開の様相が不明確なこと。
- (4) 小蘋の生涯や活動についての資料的検証がなされていないこと。
- (5) 小蘋の画業を、社会的な視点から見直した研究がないこと。

以上の問題意識から、基礎的なデータの必要性を痛感し、その蓄積、整理を着想した。また、一般に、明治期の日本画壇については、フェノロサが南画（文人画）を厳しく批判し、さらに岡倉天心が中心となって、絵画様式の近代化を推進してきたとされている。しかし、当時の美術市場では、南画（文人画）の人気は高く、社会的な需要が高かった。特に小蘋は南画家でありながら、当時、天心の影響を受けた橋本雅邦や川端玉章らと並んで、人気画家として高く評価されていた。こうした、女性の南画家という視点での明治画壇の研究は、十分になされてきていない。そこで、本研究では、小蘋の画業を社会的な視点から見直し、明治期の画壇の実態を具体的に検証するものである。

### 2. 研究の目的

本研究は、明治から大正期にかけて活躍した女性画家、野口小蘋の作品と伝記に関する総合的かつ網羅的な研究を行うとともに、彼女の当時の画壇における史的位置付けの考察を目的とする。

明治・大正期の画壇では、南画（文人画）や中国画の評価は大きく揺らいでいた。その中で、清朝風の南画を基礎とする小蘋の作品が、皇室や華族、政府高官、富商などに好まれ、万国博覧会出品画家に選ばれ、女性初の帝室技芸員に任命されるほど評価された要因は何であったのか。女性が自立して活躍することがまだ困難な時代に、係累に絵師がいたわけでもなく、画家としての本格的な修行もほとんどしたことのない関西出身の女性画家が、東京の中央画壇で、画家としての社会的な地位を急速に高めることができた要因は何であったのか。彼女の絵は誰によってどのように評価されたのか。

本研究の目的は、これらの諸問題を、幕末・明治・大正期を生きた女性画家と社会との関係を明らかにすることによって解明しよう

とするものである。

### 3. 研究の方法

- (1) 小蘋の作品、伝記、活動に関するデータを整理・分類し、網羅的なデータベースを作成する。

データベース作成のために収集する資料として、作品画像だけでなく、作品の印章・画中文字（賛、落款）・付属資料（箱書、添え状など）も含む画像及びテキストデータ、小蘋の活動や制作背景、作品の注文主・来歴、小蘋の交友関係の資料となり得る可能性の高い文字資料も収集する。

- (2) (1)において収集したデータを反映した小蘋の詳細な年表を作成する。絵画等作品の制作に関する記事だけではなく、(1)により判明した交友関係や、当時の小蘋に対する評価を示す記事など、小蘋の公私にわたるあらゆる事績が網羅された一覽性の高いものとする。

- (3) (1)(2)において収集・蓄積したデータを生かして、小蘋の作品成立の編年の可能性を考察する。

- ①各作品の印章を分類、整理し、使用状況を分析し、それぞれの使用時期について考察する。
- ②落款についても、制作年による変化や印章との組合せについて分析する。

- (4) (1)(2)において判明した小蘋画の注文主や、小蘋と交流のあった人物、活動した地域に関する情報を収集し、小蘋の活動や、作品の画題、画面形式、様式などとの相関関係を考察する。

- ①小蘋と交流のあった人物としては、小蘋画の注文主であった皇族、華族、実業家などの富商、煎茶愛好家などの好事家、政治家、詩人や書家、画家などの当時の知識人たち、また、華族学校の嘱託教授時代に交流した教育者などが想定される。これらの人物についての歴史関係の文献資料、図書資料等の収集と調査研究を行う。

- ②小蘋の婚家である野口家（甲府、滋賀）に伝来する小蘋作品及び小蘋に関わる資料の調査を行う。

- ③小蘋の作品が多く遺る甲府周辺や大阪、京都、小蘋が遊歴して絵画制作を行った滋賀、群馬、栃木など地域の作品を調査し、各地域の郷土史研究者等より専門的な知識の供与を受ける。

- ④小蘋は『墨縁奇賞』（奥蘭田、1893）、『清賞餘録』（黒川新三郎、1898）、『塩溪紀勝』（奥

蘭田、1891)、「蘭暎四十八帖」(1896、静嘉堂文庫美術館蔵)などの図録や画帖の挿絵を担当したことから明らかなように、小蘋の作品や制作活動には煎茶会や煎茶愛好家に関わりのあるものが散見される。煎茶会に集う文化人・知識人たちが小蘋の作品の受容者層と重なっていたことが想定される。そのため、煎茶関係の文献資料、図書資料等の収集と調査を行う。それにより、煎茶会に集う文化人・知識人たちが小蘋画に求めた視覚的イメージと機能、その意味について考察する。

(5) (3) (4)を踏まえ、小蘋の絵画学習や制作活動の実態と、小蘋の画風展開について考察する。さらに、明治・大正期の社会のなかで小蘋の作品のような南画が担った役割と位置付けについて考察し、小蘋という女性画家を通して、明治期の画壇の実態を具体的に検証する。

①小蘋の絵の師であった関西南画壇を代表する日根対山の作品をはじめ、小蘋の交友関係や活動、文献資料から、小蘋が実見したことみられる中国絵画(主に明・清絵画)や日本の絵画作品、画譜類を、小蘋がどのように捉え、どのように影響を受けたかという点に関して、小蘋作品との比較をしながら、具体的に検討する。

②本研究代表者のこれまでの研究によって、画風の変遷の中でのシカゴ・コロンプス博覧会への出品作「野州監原天狗巖真景」(1893)が、小蘋の山水図の展開を考える上で、大きな転換点となった可能性が明らかとなった。従来の様式化された理念的山水図から、实景の写生を山水図に取り入れることで、小蘋が近代的で新しいスタイルの山水図を模索したという仮説を検証したい。そのため、1893年当時の小蘋の絵画制作や交友関係を含めた活動の実態を具体的に提示して、小蘋が生きた時代の社会的文化的状況と造形とのかわりについて考察する。

#### 4. 研究成果

本研究では、上記の方法により、まず、野口小蘋の作品や関連資料を網羅的に調査、把握することを試みた。その調査過程で、これまで紹介されたことのない作品や資料を実見、調査する機会に多く恵まれ、論文等で紹介することができた。しかし、かなりの数の未紹介の作品や資料が存在することが明らかとなり、予想以上のデータを収集することとなったため、現在、収集したデータの整理と分析が終了しておらず、目下、データの分類整理の仕上げ及び調査資料一覧の完成を急いでいる。最終的には、画像データベースとして何らかの形で公開したいと考えている。本研究の研究成果の一部は、本報告書 14 に上げた論文「野口小蘋《設色美人図》につい

て」(『実践女子学園香雪記念資料館館報』、実践女子学園香雪記念資料館、第8号、2011、32-39頁)、「野口小蘋筆 設色美人図」(『國華』國華社、1397号、2012、64-67頁)、「野口小蘋一志を成し遂げた明治の女性画家」(『近代の女性画家 奥原晴湖 跡見花蹊 野口小蘋』展図録小山市立車屋美術館、2012、3-5頁)、「野口小蘋《上巳雛祭図》について」(『実践女子学園香雪記念資料館館報』、実践女子学園香雪記念資料館、第10号、2013、25-30頁)で報告している。

「野口小蘋《上巳雛祭図》について」では、新出資料である小蘋17歳の作「上巳雛祭図」を紹介し、画題や様式から、本作が、父を亡くし、画技も拙かった幼い小蘋の、名古屋滞在時の最初期の作であること、また、小蘋が女性であることから雛祭りと結びつけられ、若く無名の少女に注文する画題としてふさわしいと考えた名古屋の富裕層の注文によって描かれた可能性を提示し、これまでほとんど言及されなかったことがない名古屋滞在小蘋最初期の画業の様相を具体的に示すことができた。

「野口小蘋筆 設色美人図」(『國華』國華社、1397号、2012、64-67頁)では、同じく新出資料である「設色美人図」を紹介した。本稿では、小蘋の名が散見される『木戸孝允日記』を検証することにより、「小蘋」号の使用開始時期の推定を試みた。また、小蘋の娘・郁子の手記を検証し、「親」の名の使用中断時期を推定し、「親印」(白文方印)、「玉山女史」(朱文方印、「玉山」は「小蘋」以前に使われた号)が捺される年記のない本図の制作時期を慶応2年12月9日以降、明治元年6月9日以前と特定し、本図が小蘋22歳頃の作であると推定した。また、『木戸孝允日記』の検証により、本図制作時期に近い時期に小蘋が木戸ら男性知識人と共に、芸妓が同席する宴席で、揮毫や合作などを行っていたことが読み取れることから、本図の女性が芸妓である可能性を提示した。また、本図と上方美人画を比較することにより、本図の女性像のイメージの源泉が上方美人画であった可能性を具体的に指摘した。

「野口小蘋一志を成し遂げた明治の女性画家」(『近代の女性画家 奥原晴湖 跡見花蹊 野口小蘋』展図録小山市立車屋美術館、2012、3-5頁)では、小蘋作品及び小蘋に関する様々な資料のデータを収集する過程で、小蘋という女性画家が、自分が置かれた様々な時代や地域、環境に合わせつつ、積極的に知識人や、華族、富商などとの交流を重ねて、その交流の中で新しい知識を得るだけでなく、画の注文主を得るための人脈づくりも大切にすることで、画家として生き抜いていったことを、次のように具体的に提示した。上京前の無名の少女時代には、知識人らと交

流しつつ、注文主でもある彼らの求めに応じて上方浮世絵風の美人画を中心に風俗画を描いた。上京後は、煎茶、書画、立花などの文人趣味に興じる和装女性による美人画を制作しており、明治初年の文人趣味の流行を巧みに取り込み、受容者の好みに応えようとする小蘋の制作姿勢が読み取れる。

結婚後、明治 15 年に再上京した小蘋は、積極的に展覧会、博覧会等への出品、受賞を重ねた。明治期の東京画壇において、ほとんど名を知られていない画家が評価を高めるには、展覧会、博覧会への出品、受賞が重要な要素であった。

画家としての評価が高まった明治 20 年代に入ると小蘋の画題は変化する。花鳥画と山水画を制作し、美人画はほとんど描かなくなる。この画題の転換には、注文主の好みの変化など様々な理由が考えられるが、小蘋の画家としての意志も強く働いたことが推測される。本来、美人画は風俗画であり、知識人に高く評価されたのは山水画や花鳥画を中心とした南画であった。小蘋は若き日に南画の大家であった対山に入門したことから明らかなように、南画家を目指していた。小蘋自身の評価が高まったこの時期に、自らが目指していた南画家の道を歩み出すことができたと思われる。明治 30 年頃には、小蘋は画壇の頂点に立つ画家の一人となり、同 37 年には女性画家として初の帝室技芸員に任命されている。

このように、現段階の研究成果としては、多くの新出の作品や資料に関するデータを収集できたこと、またその一部を論文で紹介したこと、それらを検証することにより、これまでほとんど研究されていなかったために詳細が不明であった小蘋の画業の最初期の様相を具体的に明らかにできたことなどがあげられる。また、小蘋が、自分の立場、時代の変化、受容者の好みの変化を常に敏感に意識し、受容者の様々な要求に積極的に応えることで、画家としての頂点を極めていった様子を提示することにより、受容者や時代の変化が、小蘋の絵の画題、形式、様式等に大きな影響を及ぼしていったことを明らかにすることができた。これにより、幕末・明治・大正期を生きた一人の女性画家と社会との関係を明らかにするという本研究の大きな目的の一つを達成することができたといえるだろう。

今後、画像データベースの完成と共に、本研究の中で発見し、まだ紹介できていない作品についても、順次、論文等で紹介していくつもりである。昨年度より、「描いた女性たちに関する研究—桃山時代から明治・大正期まで」(基盤研究 [B]、研究課題番号: 24320029、研究代表者: 仲町啓子) の研究分担者としても、野口小蘋の調査、研究を継続している。

その調査の中でも、さらなる未紹介の資料の発見が予想されるため、今後も本研究課題の完成を目指すとともに、新たな切り口での小蘋研究を継続していきたいと考えている。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 3 件)

- ① 山盛弥生、「野口小蘋《上巳雛祭図》について」『実践女子学園香雪記念資料館館報』、実践女子学園香雪記念資料館、査読無、第 10 号、2013、25-30 頁
- ② 山盛弥生、「野口小蘋筆 設色美人図」『國華』、國華社、査読無、1397 号、2012、64-67 頁
- ③ 山盛弥生、「野口小蘋《設色美人図》について」『実践女子学園香雪記念資料館館報』、実践女子学園香雪記念資料館、査読無、第 8 号、2011、32-39 頁

[学会発表] (計 1 件)

[図書] (計 1 件)

- ④ 山盛弥生、「野口小蘋一志を成し遂げた明治の女性画家」『近代の女性画家 奥原晴湖 跡見花蹊 野口小蘋』展図録、小山市立車屋美術館、2012、3-5 頁

[産業財産権]

○出願状況 (計 1 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

○取得状況 (計◇件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

[その他]  
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山盛 弥生 (YAMAMORI YAYOI)

実践女子大学・研究員

研究者番号：90433763

(2) 研究分担者

( )

研究者番号：

(3) 連携研究者

( )

研究者番号：

90433763